

身体的自発性としての〈あらかじめ形成されたノウハウ〉

——リクルの〈意志の哲学〉——

箱石 匡行*

(2004年11月22日受理)

私は幾つかの選択可能なものの中から或るものを選び取る、つまり決意する。そして私はこれを実現しようとする、すなわち、己れの意志をこの世界において実現しようとする。その時、私は行動する。したがって、意志の哲学にとって、行動の研究が不可欠である。そして行動の研究において、身体の考察が不可欠になるのである。

私は身体によって、身体をとおして行動する。しかし、その行動は、つねに私の意志によって選ばれるわけではない。身体そのものがある種の自発性をもって行う行動というものが存在する。つまり、身体的自発性というものが存在するのであって、これが私の原初の行動を可能にしているように思われる。それでは、意志作用と身体的自発性との関係はどのようなものなのであろうか。

リクルは、身体的自発性として三つのものを取り上げている。すなわち、あらかじめ形成されたノウハウ、情動、習慣、これである。われわれの意志的な行動は、すでに形成されてある身体的運動形式とも呼ぶべきものによって可能になる。これは本能的運動とは区別されなければならない。またリクルは情動を、「意志作用の諸手段ないし諸器官」⁽¹⁾として捉える。つまり、情動は、「非意志的行動のばね」⁽²⁾とされている。そして習慣は、情動を馴化するものであるから、非意志的運動の源泉ともいえるべきものである。つまり、身体には、われわれにとって非意志的な運動といったものが具わっていると言ってよいであろう。これが、リクルのいう〈身体的自発性〉というものであろう。

それでは、この身体的自発性は、われわれの〈行動すること〉において、どのような意味をもつのか。以下において、このことをリクルの記述(『意志的なものと非意志的なもの』第2部「行動すること」第2章「身体的自発性」第1節「あらかじめ形成されたノウハウ」)に即して、そのテキストと共に考えていくことにする。というのは、滝浦が指摘するように、「彼の議論は、簡単には要約を許さないほどに入り組んだものであり、しかもその詳細さは大抵の場合、分析の両義性に結びついている」⁽³⁾からである。

1. 〈あらかじめ形成されたノウハウ〉という概念

私は、自分の決意したことをこの世界において実現しようとする。そのとき、私は、実現す

* 岩手大学教育学部

べきことを目指して行為を行う。行為の最も基本的な構成要素とは「あらかじめ形成されたノウハウ」⁽⁴⁾であって、決して反射とか本能的運動といったものではない。「あらかじめ形成されたノウハウ」とは、「われわれが学習しうるし、努力によって獲得しうるようなあらゆる運動の萌芽」⁽⁵⁾を意味する。これは、「非一反射的な種類の生得的な、もっと適切にはあらかじめ形成された運動」⁽⁶⁾である。リクールが解明しようとするのは、非意志的なものの心理学的記述という観点から、そうした運動を相互に区別すること、すなわち「これらの運動がそれぞれにどんな違った仕方では非意志的なのか」⁽⁷⁾ということなのである。

ここで言われている反射とは、「或る記述的なタイプの反応」⁽⁸⁾であって、「分析から生じ、そして複合的な行動の説明に押し付けられる理論的で理想的なまでに単純化された図式」⁽⁹⁾ではない。

いわゆる反射理論はすでに批判されてきた。反射理論は、機械論的解釈をもとに、「神経系の全体的機能」⁽¹⁰⁾を「機械的な型式の部分的諸過程の総和」⁽¹¹⁾と捉える。つまり、刺激は、局所的に限定された受容器に作用し、一定の反応を産み出すのであり、したがって「局所解剖学的諸要件が反応の形態を支配する」⁽¹²⁾というわけなのである。

しかし、このような反射理論に対して、ヴァイツゼッカーやゴールトシュタインが批判を加えた。これは、メルロ＝ポンティの著作によって、フランスでも知られるようになった。彼らの批判が妥当であるとするれば、そもそも反射なるものは存在しないということになり、リクールが行おうとしている区別、<あらかじめ形成されたノウハウ>と<反射>の区別は、意味を持たないことになるのではないのか。この疑問に対して、リクールは、ヴァイツゼッカーとゴールトシュタインが批判しているのは、「理論上の反射、つまり特定の刺激に対する純粹で紋切り型の恒常的な反射」⁽¹³⁾である、と指摘する。このような反射なるものは、決して有機体の正常な活動を表しているのではなく、「病気にかかった有機体の行動とか、人工的に単純化された刺激に対して解体された諸部分によって応答することを余儀なくされた実験室の行動」⁽¹⁴⁾ではないのである。

リクールは記述的の観点を取る。この観点から彼が、教育可能な最初の運動つまり<あらかじめ形成されたノウハウ>と対比しようとしているのは、病気とか実験室において見出される反射運動ではない。彼は、「有機体の正常な機能も、若干の記述的基準に照らして反射と性格づけられるような運動を示している」⁽¹⁵⁾と言うのである。だが、それはどのような運動なのであろうか。

リクールが<反射>と呼ぶものは、「さまざまなタイプの要素的運動が実現する非意志的な運動の型、つまり或る種の常同性、衝動的で生に対する比較的な自律性、とりわけ意志にとっての根本的な抑制不可能性に関わる」⁽¹⁶⁾ものである。この意味における反射は、古典的著者たちの理論的反射に見出されるだけでなく、ゴールトシュタインが反射に対置する<組織化された行動>の内部にも見られるのである。しかし、リクールがここで反射を問題にするといっても、それは、ゴールトシュタインのように生理学的なものではなく、心理学的なものである。そして「反射の心理学は、反射の果たす諸機能の研究、もっと正確には、これらの機能の非意志的な性格の研究と共に始まる」⁽¹⁷⁾。ここで注意しておくべきことは、「反射が他の原始的運動とは違って抑制不能だということ」⁽¹⁸⁾である。つまり反射とは、「意志的総合には同化されない」⁽¹⁹⁾ものをいうのである。

このように、反射とは、われわれの意志に反して、われわれの意志とは関係なしに生じてく

るものと言える。基本的には、反射は、意志的なものと非意志的なものとの循環に介入して行くことはない。たしかに、意志は反射の幅を制限したり、これを遅らせたりすることはできるが、しかし「反射は、[私の]意志と関わりのない絶対的に非意志的なものを実現する」⁽²⁰⁾のである。それでは、この私とは、何なのか。「私は、反射の座であり、私から逃れるこの作用の付随現象的意識として私に現われてくる」⁽²¹⁾。このような意味における反射は存在する。しかし、われわれの行為の最も基本的な要素とはこのような反射ではなく、くあらかじめ形成されたノウハウ>なのである。

それでは、くあらかじめ形成されたノウハウ>とは、どのようなものなのか。われわれは、学習とか自己の身体についての知といったものの以前に、「知覚された対象と結びついたわれわれの身体、原初の用法」⁽²²⁾といったものを持っている。成人の動作はすべて学習によって獲得されたものかも知れないが、われわれの動作はすべて、「知覚世界の識別に関わる諸信号にあらかじめ結びついた最初の行動力に由来」⁽²³⁾している。

リクールは、P. ギヨームの『幼児における模倣』に依拠しつつ、生後間もない幼児の心理学は「あらかじめ形成されたことが明白な感覚運動的統一体の重要性」⁽²⁴⁾を示した、と言う。たとえば、幼児はまだ学習していないのに、目と顔とを共に動かしつつ見ている対象物を追っていくとか、手を見ることなしに自分の注意を引きつけている対象物の方へ手を伸ばすことができる。このような行動において、運動と思考とが接合していると言わなければならないが、こうした運動と思考との接合は、意志に関係なく行われている。したがって、「世界が私に現前するや否や、私は自分の身体も世界も知らずに、自分の身体について何ごとかをなすことができる」⁽²⁵⁾ということになるわけである。

それにしても、くあらかじめ形成されたノウハウ>という表現よりも、本能的行動という古典的な表現の方がはっきりしているのではないか。なぜ、本能という語を用いないのか。リクールは二つの理由をあげる。第一に、本能という用語は、記述的タイプの行為を十分正確に示していないだけでなく、時節外れの哲学論議を引き起こすような説明原理を思い出させることにもなりかねないからである。第二に、本能という用語は、「動物性というものを大よそ定義する行動の一般的レベル」⁽²⁶⁾を表すためにこそ、用いられるべきものであって、それというのも、このレベルでは、本能とは、「自分自身のうちに秩序をもって、本来の意味での生命的な自己規制を行うような行動」⁽²⁷⁾を意味しているからである。

リクールがくあらかじめ形成されたノウハウ>という新しい用語を用いるのは、この語が純粹に記述的な語であり、「行動を突き動かす衝動についても、とりわけ行動を規制する上級審についても予断を下さないという利点」⁽²⁸⁾をもっているからである。くノウハウ>という用語にくあらかじめ形成された>という形容語が付けられている。く生得的な>という形容語は不適切なのである。というのは、「く見ること>やく聞くこと>等に制御されたそれらの行動は、その上に新しい動作が限りなく構築されていくものである」⁽²⁹⁾からである。そしてこのような点において、それらの行動は、「われわれなしでもわれわれに対する事物の作用によってわれわれのうちに生み出される運動」⁽³⁰⁾から根本的に区別されるものなのである。

リクールは心理学的・記述的な視点をとっている。したがって彼は、生理学者たちが反射と呼んでいる諸現象を取り上げない。たとえば、生理学が食欲の根底に見出す収縮や分泌のメカニズムは、リクールによれば、反射としてわれわれに与えられるのではなく、衝動を通じて認識されるのである。確かに、われわれの衝動には反射が隠されていると言うべきなのかもしれ

ない。しかし意志が会おうのは欲求の衝動なのである。リクールの記述的方法が求めているのは、「非意志的という資格で与えられるがままの機能に接近すること」⁽³¹⁾であり、彼は反射という言葉を使わないのである。

リクールは次のように述べる、「生理学が欲求の根底、もっと広く言えば組織化の根底に発見する反射とは対照的に、保護とか防衛・適応・調節・探索などの反射は、身体のなかの反射として、あるいは私に対する世界の制御不能な支配として与えられる。それらの反射は、それをいわば自分の客観的裏面としている体験の側には含まれていない。これらの反射は、それらだけで、最初の緊急適応とともに機能の萌芽を構成するのだ。だから意志は、全く独自の仕方ですべてこれらの反射と対決するのである。これらの反射は、それらに対応するノウハウとは区別されなければならない。やがて見るように、たとえ反射が最初の防衛の秩序で重要な役割を果たすとしても、基本的な適応の秩序においては、ノウハウこそが決定的に優位を占めているのである」⁽³²⁾。

2. 防衛と保護

リクールは、「保護と防衛の反射を、それに対応するノウハウから分かつことは、かなり容易である」⁽³³⁾と述べている。その理由を考えてみよう。

われわれの身体の反射運動がわれわれにとって持つ意味とは、われわれの生命あるいは身体を防衛し保護するものだといって良いのかも知れない。実際、身体的生命の防衛や保護の意味を持つ反射を枚挙することは、それほど困難なことではない。リクールも、「反射が驚くほど適応した防衛手段を提供してくれるというのは、顕著なことである」⁽³⁴⁾と言う。その例として初めに挙げられるのは、感覚器官の機能を保障するための専門化した防衛反射である。具体的にいえば、眼瞼の瞬き、眼球の外皮膜や角膜・結膜が刺激されて生ずる流涙、中耳の耳管が刺激されて生じる<くしゃみ>や鼻汁、などである。こうした外-受容系の反射は、防衛作用として理解される。さらに、消化器官の保護の役割を果たす排出機能も挙げられる。具体的な例としては、気管の粘膜を刺激する固体や液体を排出しようとする咳、大きな物や角張った物が喉の口蓋垂に触れると生じる嘔吐、などが挙げられる。

こうした反射は、文字通り瞬間的な、あるいはごく短時間の運動であるが、身体的生命を保護し防衛するという機能を明示している。われわれの意志がこうした反射と争うなどという機会、ほとんどないといってよいであろう。<ほとんどない>というのは、礼儀作法に則り行動しようとする意志が、あるいは危険や試練を乗り越えようとする意志が、反射運動との間に葛藤を生み出すことがあるからである。

しかし、「意志は時には、このあつという間に生ずる機能を、熟慮された行為の豊かさと強靱さの下にやり過ごし、いわば沈み込ませることもできるだろう」⁽³⁵⁾たとえば、催涙ガスの障壁を突破しようとした人が、このガスのために涙を流すことは止められないが、自らの決意によって導かれる全体的志向によって制御された行動路線を貫くということもあり得るのである。あるいは、意志が反射運動を相対的に抑制するということが可能であろう。たとえば、巡回中に咳や<くしゃみ>を我慢しようとしている兵士は、「抑制不能なもの」と抑制可能なものの境界線にいる」⁽³⁶⁾。彼の咳や<くしゃみ>は奇襲を失敗させることになるかも知れないのである。あるいは、厳粛な儀式に参列している人が咳や<くしゃみ>を我慢することは、珍

しいことではあるまい。

それでは、〈意志は反射を抑制している〉あるいは〈意志は反射を抑制することが可能である〉と明言できるのであろうか。リクールはこう述べる、「いずれにしても、意志は反射に自分を重ねることができるだけであって、これを真に自分に同化することはできない。統御は、意志の歩みの行程上にある筋肉に限られており、反射を遅らせたり、その幅を制限するだけに限られるのである」⁽³⁷⁾。

いま見てきたのは、もっぱら防衛や保護をその機能とする反射である。この外に、一般的防衛の機能を持っているものとしては、痛みの反射がある。痛みの反射は、われわれの生命的存在を防衛するという機能を持っている。知覚自体が痛いというのではない。「感覚末端に隣接した一般的感性の器官だけが、苦痛を伝える」⁽³⁸⁾のであって、苦痛は、その痛みそのものによって反射が生じるそのきっかけともなりうるものなのである。つまり苦痛は外界との出会いを前提にするのであって、苦痛は、防衛反射より、もっと原初的なものなのである。してみれば、「防衛というこの反応は、意志作用がうまく自分を重ね合わせたり合わせられなかったりする反射である」⁽³⁹⁾ということになるのである。

身体が蒙る苦痛は、身体に対する攻撃を意味する。苦痛は、身体にとってショックであり、身体を消耗させる。苦痛が長引くにつれ、身体はますます疲れる。苦痛は、ついには「意志作用からその行使の生命的基盤を取り上げる」⁽⁴⁰⁾までになる。したがって、苦痛は、事実上、われわれの意志作用の限界をなすのである。もちろん、「運動が意志の歩みの行程上にあり、神経—筋肉的メカニズムが器官に応答の余地を与え衝撃と疲労との作用がまだ思考し意志することを許容する限りでは、意志が反射の解放を抑制し、制限しようと試みることはできる」⁽⁴¹⁾ことであろう。しかしながら、「意志はほとんど何もすることができない」⁽⁴²⁾のである。

それでは、防衛とは、われわれにとって、一体、何を意味するのか。防衛の意味は、苦痛に対する反応や反射のなかにではなく、「苦痛を予防する行為や、有害な作用因を感官や想像によって先取りさせてくれる行為のうちに」⁽⁴³⁾こそ、見出される。われわれが何か苦痛を先取りし、苦痛を予想するとき、われわれのうちには〈恐れへの衝動〉が生じる。恐れは、予期される苦痛とこの苦痛に見出される悪の持続的脅威から生じる。恐れとは、〈これから到来すると予想される苦痛を恐れる〉ことなのである。

リクールは、ここで、苦痛と恐れについて、倫理的な発言を行う。「苦痛に関する人間の知恵の本質は、苦痛の反射の抑制にあるのではなく、苦痛の体験を物ともせずに行動する勇氣にある」⁽⁴⁴⁾、と。この〈行動する勇氣〉とは、恐れに対する人間の知恵というべきなのかも知れない。というのは、われわれの行動を抑制するのは、苦痛を予期することから生じる恐れへの念であるに違いないからである。

したがって、勇氣とは、「脅威に付随する諸表象に立ち向かい、利用できるあらゆる注意力を、その保持が求められている情念のないし道徳的理念——例えば、私とその証人であり続けるべき信仰、また満たされるべき野心、破られるべき記録、到達されるべき目標等々——に捧げること」⁽⁴⁵⁾に他ならない。到来するであろう苦痛を予期することから眩暈が生じる。ひとはこの眩暈と戦わなければならない。この戦いに打ち勝って、実現すべき理念の方向へと行動を起こしていくこと、これが人間の知恵であるというわけである。

リクールは勇氣そのものうちに、意志作用と身体との結びつきを見出す。勇氣とは〈利用可能なあらゆる注意力を実現されるべき理念に捧げること〉であるが、「この注意の働きには、

筋肉的構成成分が含まれている。理念への注意は、筋肉群に対する努力でもある」⁽⁴⁶⁾からである。そこには、これから行われるであろう運動が素描されているが、それは、〈あらかじめ形成されたノウハウ〉の一族といえるものであろう。したがって、〈苦痛が反射として生じることを抑制する〉ことの意義が、勇気において明らかになる。「苦悩の倫理学は、危機に注がれた注意を恐れることなく退け、素描された逃亡を抑止することによってのみ、真に始まるのである」⁽⁴⁷⁾。

こうして〈反射〉と〈あらかじめ形成されたノウハウ〉の本質が明らかになってくる。幼児は、攻撃や防衛の初歩的な技法を持っている。幼児は、手を顔にもっていき、相手の攻撃を避けるとか、自分の身体全体を動かして、向かってくる物をかわす。こうした〈本能的〉行為は日常言語では反射と呼ばれる。しかし、リクールは、それは決して反射ではない、と言う。そうした〈本能的〉行為をさまざまな仕方で組み合わせ修正することを通して、たとえば、スポーツの種々の技術が作り上げられていくのである。つまり、「それらは、知覚によって規制されたきわめて可変的な運動的総体であり、距離を置いて全体的に知覚された対象との関係で身体を使う、その最初の用法、運動性の感官への最初の適合を構成するのだ」⁽⁴⁸⁾。

われわれは打つ〔叩く〕技法を身につけているが、通常、この技法は隠されている。この隠されている技法は、それ自体のうちに自発性を具えているが、自らを顕在化するものではない。これは、その意味で「惰性的なもの」⁽⁴⁹⁾である。これが顕在化するのとは、たとえば、恐れや怒りの情念によって生気づけられてのことである。われわれが実際に、何かを、誰かを打つ〔叩く〕のは、恐れや怒りの情念において、「欲求や情念や意志の衝動」⁽⁵⁰⁾において、である。

3. 我有化、調節、探査

リクールが、第二のクラスの基本的行為として示すのは、我有化、調節、探査の反射である。彼は、差当り、二つの注意を行う。まず、それらの反射のすべてが防衛反射というわけではないということ。次に、それらの基本的行為においては、「ノウハウが型にはまった反射よりも決定的な仕方で優位を占める」⁽⁵¹⁾ということ。これである。

我有化反射とは、何ものかを身体的に我がものにしようとする反射である。たとえば、新生児の吸引反射、唾液分泌反射、咀嚼反射である。前節において見た防衛反射は、有害な刺激に対して自己を防御するための反射であったが、我有化の反射は、「有害な刺激とは関係しないタイプの応答」⁽⁵²⁾である。

唾液分泌反射については、パヴロフの条件反射の研究がよく知られている。リクールは、その条件反射の射程を制限する二つの点を指摘している。

第一。パヴロフは条件付けによって行動の高次の諸形態を説明しようとするが、「条件付けは、新しい行為を作り出すのではなく、連合した諸刺激に反射生起力を転移させるだけ」⁽⁵³⁾であり、しかも、「その〔条件反射の〕運動は、初歩的なタイプの反動にとどまるのであって、柔軟なタイプの応答ではない」⁽⁵⁴⁾ということである。人間にとって重要なのは、柔軟なタイプの応答であるが、こうした応答を生み出すのは、「遠くから知覚された対象によって制御された基礎的運動」⁽⁵⁵⁾であって、何か外界のものが接触したからといって生ずるような反応ではない。

第二。我有化反射は、われわれが飲むとか食べるという広範な行為のなかに、他から切り離

され得るものとして組み込まれている。しかし、そうした飲食の具体的な行動の流れにおける最も重要なもの、最も決定的なものは、反射のタイプに属するものではない。こうした我有化反射は、「特殊な諸器官の『下準備 (mise en train)』」⁽⁵⁶⁾といったものにすぎないのであり、「知覚によって規制された完全な行為」⁽⁵⁷⁾とは言えない。

リコールは第二のクラスの基本的行為として、調節反射と探索反射を挙げている。これらの反射は、「感覚器官を出発点とし、そしてこの感官を担う運動器官を効果器とする一群の反射」⁽⁵⁸⁾に属する。何か急に接近してきたとか、突然、強い光線を受けたという場合、われわれは反射的に眼を細める。これが調節反射である。また、視野のなかを動いている対象を眼で追いつづけるという反射運動、これが探索反射である。これらは、〈具体的な状況への適応〉としての「方向づけ反射」⁽⁵⁹⁾である。しかも、こうした反射は、「注意の反射部分を構成する」⁽⁶⁰⁾。このように、〈具体的な状況への適応〉としての反射は、「私の身体の反射」⁽⁶¹⁾ではなく、「事物そのものによる私の注意の誘因、私の意識に対する世界の打ち勝ち難い支配」⁽⁶²⁾として私に与えられるものなのである。

それでは、調節反射と意志作用とはどのような関係にあるのだろうか。調節反射は、「最初の緊急の調整を素描している」⁽⁶³⁾。そして意志は緩慢に作動する、つまり「遅延においてのみ君臨する」⁽⁶⁴⁾。したがって、具体的な状況においては、意志は調節反射と衝突するものではない（訓練とか遊びとしては、われわれは眼を細めないように意志することはできる）。

したがって、調節反射と探索反射は、我有化反射と同様、意志作用と重なり合うとすることができる。それというのも、それらの反射は、「その最も重要な線分が反射のタイプには属さない観察・探求というより広範な行為に組み込まれている」⁽⁶⁵⁾からである。

それにしても、調節反射や探索反射は、身体から空間的な距離を置いて知覚された対象への反応なのだから、防衛反射がノウハウから区別されるほどには、ノウハウから区別されない、そう考えられるのではないのか。これに対して、リコールは、「それでもやはりこれらの反射は、もともと関係の生命全体を知覚に合わせる探索や移動・把捉・操作というあらかじめ形成された行為から区別される」⁽⁶⁶⁾と述べる。

生後数日の赤ん坊が眼に見える対象物の方へ手を差し伸べる。また生後数ヶ月の幼児は、歩行運動を示すようになる。こうした反射行動は、「さまざまな欲求に従っており、無限に教育可能である」⁽⁶⁷⁾。こうした反射とノウハウとは異なるが、両者の間には連続性が見出される。たとえば、眼差しの調節とか反射的固定は適応した行為とはいえませんが、「適応した行為を準備してくれる」⁽⁶⁸⁾、すなわち、「有機体全体を巻き添えにする行為は、局所的器官の反応を自分のうちに併合してしまう」⁽⁶⁹⁾のである。現象学的な表現を用いるならば、「局所的器官の反応は、それを単なる一線分とするような全体的行為のなかに身を隠す」⁽⁷⁰⁾のである。

4. 〈反射〉と〈あらかじめ形成されたノウハウ〉との一般的対立

それでは、〈反射〉と〈あらかじめ形成されたノウハウ〉との相違とは、どのようなものなのであろうか。

まず、反射には三つの特徴が見出される。①比較的にみて常同的であること、②容易に分離可能であること、③抑制不能であること、これである⁽⁷¹⁾。これに対して、〈あらかじめ形成されたノウハウ〉は、反射とは対照的な、以下の三つの特徴をもつ。

(1) 初めに理解しておくべきことは、「反射の常同性は、有機体の基礎的機能を表すものではない」⁽⁷²⁾ということである。ゴルトシュタインが『有機体の機能』において示しているように、自然な状況においては反射行動は見出されないのである。病気であるとか、実験室において人為的条件のもとに置かれたというように、生命体が突然、生命の脅威に曝される状況、いわば極限状況においては、反射行動が見出される。したがって、反射について語る場合には、われわれは当の反射を引き起こした状況を無視してはならない。反射から出発したのでは、有機体と真に有機体的な行動を理解することはできない。

最初のノウハウは、「すでに柔軟な形態、可変的な内容をもった構造——よく言われてきた言い方をすれば『運動的メロディ』——」⁽⁷³⁾である。最初のノウハウは、単純な諸刺激に対する応答といったものではなく、すでに複雑な知覚的組織化を示している判別的局面（質とか形など）に対する応答なのである。したがって、こうした最初の運動は、無限に移調可能な変奏にとって、あるいは、しだいに複雑になっていく楽曲にとって、運動的主題〔推進的な主旋律〕になりうるようなものなのである。

ゲシュタルト心理学は「図形は背景との関係において図形として知覚される」というが、同様に、われわれの各々の行為は、全体的姿勢を背景としている。ゴルトシュタインが「[生体の] 行動は、その都度『特権的行動』を実現しようとする傾向をもっている」⁽⁷⁴⁾と指摘しているように、われわれ人間の行動においても、行動の課題や意図・出発時の状況・当初の姿勢との関係において、〈特権的な行動〉（あるいは〈最適の行動〉）が予め想定され、これが実現されるわけなのである⁽⁷⁵⁾。

〈特権的な行動〉（〈最適の行動〉）は、無意識的に、非意志的に行われる。このことは、ゴルトシュタインが反射行動を論じながら、〈特権的な行動〉を考察していることから明らかであろう。リクールは次のように述べる、「運動の図と地へのこの非意志的配分も、われわれの意図にとっては、習慣がその延長となり、また意志がその責任で捉え直すべき学習によらない多様なノウハウの特殊な形態と同じくらい重要である。この配分は、意志が自由に操りうる非意志的諸力の最も一般的な、もっと適切には最も包括的で全体的な構造面とみなすことができる。たとえば私が自分の意志していることを行うとしても、私は、それを、非意志的なノウハウから出発して、しかも非意志的な特権的行動の全体的様相に即して行うのである」⁽⁷⁶⁾。

(2) 反射運動は、たしかに全体的な行動に関係を持っている。この意味において、反射行動も全体的な行動に依存していると言える。しかし、反射行動は全体的行動から、相対的に自律している。この相対的自律性は、「反射が欲求や他の感情的衝動にかすかにしか依存していないこと」⁽⁷⁷⁾に関係づけて、理解されるべきである。すなわち、「反射は刺激に従属している」⁽⁷⁸⁾のである。

これに対して、ノウハウは、外部からの刺激に、外部に従属しているのではない。というのは、われわれの欲求・感情的衝動・意志的志向がノウハウを内的に生氣づけるのでない限り、ノウハウはそれ自体、相対的に惰性的なままだからである。

われわれは欲求や感情的衝動を自分の責任において捉え返すことができる。したがって、欲求と知覚信号とノウハウの三つの用語が本質的に結合することになる。刺激は反射運動を産み出すが、知覚信号は運動を規制するだけである。欲求が私から何らかの動作を引き出すのは、私が欲する対象が私を外部から生氣づけるからではなく、欲求が私を内面から生氣づける限りにおいてのことである。欲求から生ずる衝動、そして、外的信号による運動の倦怠に関する規

制は、非意志的なものである。そして欠如と跳躍の存在そのものとしての私のうちにおいては、衝迫が意志の衝迫と合成されるということもある。しかし、「ノウハウの信号への非意志的結びつきは、衝迫や発動に関わるのではなく、運動の展開形態に関わる」⁽⁷⁹⁾のである。

そしてリクールは、反射とノウハウとの第二の対立を指摘する。この対立を理解するためには、次のことに注意しておかなければならない。すなわち、このノウハウを規制する対象は、たんにゲシュタルトと質についての弁別特性 (*des propriétés discriminantes*) や魅力 (*un attrait*) のような感情的特性 (*des propriétés affectives*) を具えているだけでなく、空間的な距離を置いたところに存在するという、これである。たとえば、生命体によって捕らえられるべき食物が、現にここに存在しない、不在であるから、それが生命体によって欲せられる。そしてこの食物は生命体から或る距離を隔てて存在しているから、生命体はこの食物を知覚する。「知覚は、対象の可能的作用を先取りする」⁽⁸⁰⁾。対象を知覚することによって、生命体は何らかの行動に目覚めるが、この行動はその対象によって規制される。つまり、この行動は、「前もって告げ知らせる (*pré-ventif*)」⁽⁸¹⁾という性格をもつ。それは「遅延 (*délai*)」⁽⁸²⁾として特徴づけられるのである。

反射は、知覚のもつ〈先取り〉を前提にするのではない。反射を引き起こす刺激物は生命体に接しており（生命体との間に距離がない）、生命体に許されるのは刺激物に対する反作用（反応）である。反射は、事物の作用 (*action*) に対して行われる反作用（反応、*ré-action*）なのである。生命体から距離を置いて存在する対象は、生命体に欲求を目覚めさせることができるが、距離を置いているために、生命体に反射を引き起こすことはできない。生命体を知覚する対象は、生命体から距離を置いて存在しているのだから、生命体に欲求を目覚めさせ、生命体の行動を、距離をとったところから、規制するのである。獲物を見つけた動物は跳躍し、その獲物を追いかけて、走ってこれを捕らえ、食らいつくのである。

(3) 〈あらかじめ形成されたノウハウ〉は非意志的なものである。ただし、この非意志的な特性は、反射が抑制不可能であるという特性から区別されなければならない。たしかに、反射は非意志的なものだから、反射を意志作用に同化することはできない。しかし、反射は、刺激に対して、〈遅延〉なしに反応する（反作用を行う）。つまり、反射は外界の刺激に対してうまく適応する。あるいは、「反射は、意志の行いえないようなことをうまく行う」⁽⁸³⁾。したがって、反射は意志作用の前触れとなっている。「反応は刺激に、手段は目的に直ちに連結するのだ」⁽⁸⁴⁾。反射に続いて意志作用が生じる。意志作用は反射に隣接し連続して生じるのである。

反射は非意志的なものである。「反射は、私のうちに私なしに存在する」⁽⁸⁵⁾。〈あらかじめ形成されたノウハウ〉も、われわれの意志によって形成されたものとは必ずしも言えないのである。知覚と身体的運動との結びつきは、意志されたものでも、学習されたものでもない。この意味では、ノウハウもまた、非意志的なものである、と言わなければならないのである。

歩くとか把えるといった運動の内的な調整とこの運動の制御対象の体系への調整とは一切の意志に先行して、つまり非意志的に行われる。ここで〈非意志的な〉というのは、「それ自身意志によって飼慣らされ統合される衝動が、知覚されるがままの世界に初めから適応した有用な動作へとおのずから延長される」⁽⁸⁶⁾という意味である。ここで、リクールは重要な指摘を行う、「まさにそこには、手段的（構造的など言えば、もっと適切かもしれないが）非意志的なものという姿をとった、知覚するコーギトと行動するコーギトとの最も原初の結びつきが

あるのだ」⁽⁸⁷⁾、と。

＜私はあらゆることを学習する＞とかく私は、知覚に運動を結びつける仕方をゼロから学習する＞ということは、不可能である。私の意志的な学習が可能になるのは、私が、学習することなしに、多少の基本的動作を行うことができるからである。つまり、＜知覚するコーギト＞と＜行動するコーギト＞との原初の結合は、自然が意志に与えた賜物、「最初の土台設定」⁽⁸⁸⁾なのである。これは、すなわち、「すでに、『私はできる』の『私は知覚する』への合一が、やがて欲求や情念や意志的志向などの衝動によって動揺されるはずのあの惰性的諸構造のなかで系統的に行われている」⁽⁸⁹⁾ということを意味しているのである。

ノウハウを＜刺激によって産み出されたもの＞と理解することは出来ない。第一に、「ノウハウは知覚対象によって支配されているのであって、物理的的刺激によって支配されるのではない」⁽⁹⁰⁾からである。第二に、「これらの対象は、意志作用の支配に身を任せる〔自らを委ねる〕ことに特性があるような感情的衝動を条件としてのみ、効力をもつ」⁽⁹¹⁾のだからである。幼児の動作——たとえば、何かを目で追う、歩く、捉える、といった動作——がそれとしての意味を受け取るのは、そうした動作を生気づけ使用する志向や欲求からである。

古典的心理学は、行動を理解するために防衛反射を好んで取り上げる。そのために、行動は、＜刺激—反応＞というタイプの機械的な系から派生したものと考えるようになる。そして古典的心理学は、行動の基礎的形態を機械的な部分から組み立てられているものと考えことになる。したがって、意志がそうした基礎的な行動を捉え返すということが理解不可能になってしまうのである。

古典的な心理学が行動を、「あらかじめ形成された型通りの反射の連鎖という原理」⁽⁹²⁾によって説明するのに対して、ゲシュタルト心理学は行動を、「可変的な解決をもった緊張の動力学」⁽⁹³⁾によって理解する。行動は、それを構成している諸部分に分解したり、その諸部分の加算によって再構成されうるといったものではない。行動とはすべて「有意味的な動作」⁽⁹⁴⁾なのである。このことは、「欲求の様相と知覚された世界の意味とが、基礎的な行動にそれらのスタイルを与える」⁽⁹⁵⁾ということの意味している。

意志は、欲求によって引き起こされた行動を規制しようとし、実際に規制する。それは、「欲求によって引き起こされる行動は、原理的に意志の規制に適合するものである」⁽⁹⁶⁾からである。私は自らの奥底からわき上がってくるような欲求を受け入れることも、拒否することもできる。私は、欲求に対して、自らの態度を決定することができる。しかし、意志は、反射に対してなす術をもたない。私の身体には、動作を知覚に結合するような＜予め形成された構造＞というものが存在している。そしてこの構造は惰性的なものである。これに対して、＜予め形成されたノウハウ＞は、あらゆる身体的適性の源泉をなしている。そしてこの身体的適性が、＜意志作用がこの世界に参入すること＞を可能にするのである。

5. ＜観念—運動＞的反射と模倣の問題

＜反射＞と＜予め形成されたノウハウ＞との差異とは、何なのか。リクールは、この微妙な差異を、＜観念—運動＞的反射と模倣の問題として分析・解明している。この解明は、人間身体という自然と人間の自由意志との微妙な関係を解明するという意味を併せ持つものである。

＜観念—運動＞的反射と模倣とが、対比的に取り上げられている。これは、なぜなのか。そ

これは、模倣という現象が、反射についてリクールが行ってきた分析的考察を再検討するよう要求しているからであろう。

それでは、模倣とはどのような現象をいうのであろうか。「或る行動がそれに対してモデルの役を果たすと同時に刺激の役割も果たすようなもう一つの類似の行動によって発動される」⁽⁹⁷⁾もの、それが模倣本能であると一般に理解されている。しかし、リクールは、「類似のものがそれだけで、反射の刺激の効力と比肩しうような効力をもつだろうか」⁽⁹⁸⁾、と問う。

19世紀から20世紀にかけて活躍した心理学者たちは、類似のものの持つ原始的な力を確信していた。彼らは類似のものを、「運動の表象がおのずから類似の運動を産み出すとされる<観念-運動>的反射の特殊な一例」⁽⁹⁹⁾と考えていたのである。たしかに、<観念-運動>的反射とは、「表象が類似の運動を産み出す」⁽¹⁰⁰⁾ことを意味している。しかし、この場合、類似のものが外的モデルとしての役割を果たすのであり、その外的モデルは、「別な主体によって提供されるような特殊な運動表象」⁽¹⁰¹⁾ではあっても、行動の素描を主体自身が産み出すようにさせるという訳のものではない。

模倣本能とは、通常は、「外的モデルの起動力」⁽¹⁰²⁾を意味するのだから、この起動力とは、「運動能力の起動力という一般的定理の一つの系」⁽¹⁰³⁾でしかないことになる訳であろう。したがって、<観念-運動>的反射がその意味と重要性をもっていると考えれば、われわれは意志的運動とは無縁であるとは言えないタイプの反射に直面していることになる。つまり、「われわれはここで、意志的運動の源泉そのものに居合わせている」⁽¹⁰⁴⁾ことになる訳である。

リボーは、「運動の観念はすでに実行の開始であるが、この運動は大抵の場合、精神的文脈全体によって妨げられているために、傾向の状態にとどまっている」⁽¹⁰⁵⁾と考える。してみれば、<観念-運動>的反射は、相互に結合し抑制しあうことによって、<意志の柔軟性>と<意志の見かけ上の運動的発意>を産み出すことになる。そして<観念-運動>的反射は、放心による自動運動、習慣的自動運動、病理学的自動運動、意志的自動運動などの原理になる。つまり、初めに自動運動が存在する、というわけである。したがって、意志そのものの起源は、「反射のレベル、原則として可能的意志への依拠を予想しない非意志的なもののレベル」⁽¹⁰⁶⁾にこそ求められるべきだ、ということになる。だが、こうした考えは、<わたしは意志する>の還元不可能な性格と<意志的なものと非意志的なものとの相互性>についてのリクールの考えとは、まったく相容れないものではないのだろうか。

ひとは、次のように主張するかもしれない。すなわち、<運動の表象、あるいはその運動の運動感覚的表象は、自らこの表象に対応する運動をそこから引き出したり、産み出したりすべき何かを持っている>と、あるいは「意志的運動は、<観念-運動>反射の抑制と修正によって生ずる」⁽¹⁰⁷⁾と。

しかし、<観念-運動>的反射は、リクールがこれまで考察してきた反射と比べるならば、特殊なタイプのものであることが分かる。それというのも、<観念-運動>的反射は、教育可能性をもっているからであって、これに対して、一般にいうところの反射とは、刺激が運動の観念を経由することなく、運動を生じさせるもの、つまり、刺激自体に対する応答であって、刺激は産み出される運動とは関係のないものだからである。

リクールは、「この反射の力は、経験によっては検証できないほどかなり人為的な構築作業に立脚している」⁽¹⁰⁸⁾と指摘する。ここで想定されているのは次のようなことである。すなわち、「偶然に産み出された運動や受動的な運動は、外的ないし内的なさまざまな感官によって

知覚されるし、そして運動とその知覚との間にこうした緊密な結びつきがあるために、この知覚の痕跡が今度は運動そのものを再生産しようような直接の力をもつに至る⁽¹⁰⁹⁾ということ、これである。要するに、「運動の感覚は、運動のイメージになることによって、運動の原因になる⁽¹¹⁰⁾」ということである。しかも、運動感覚的イメージが、「運動そのもの（それが受動的であれ衝動的であれ）にいわば密着した運動の筋肉感覚という性格自身のおかげで、特殊な力をもつ⁽¹¹¹⁾」ことになり、こうして「運動感覚的イメージの優位性⁽¹¹²⁾」という考えが生ずることになるのである。

そしてひとは、この運動感覚的イメージを、二重の意味——<運動を表象するイメージ>と<運動を生み出すイメージ>——において「運動的イメージ⁽¹¹³⁾」と呼ぶことになる。運動的イメージのもつ直接的な力は、学習を前提にするものではないという意味において、「原始的なもの⁽¹¹⁴⁾」である。表象と運動との間に見出される類似性が具えている「不思議な因果的な力⁽¹¹⁵⁾」は、このようにして説明されるのである。

しかしながら、リクールは、<このような運動的イメージなるものが単なる構築物でしかないことは、明らかだ>と言う。それというのも、彼によれば、<観念—運動>的反射に対する批判は、ここで、予期せぬ語詞映像 (image) の中枢に関する議論（この議論は、失語症に関する有名な論争においてさまざま<図式>を想定していた時期に続いて行われた）に結びつくことになる。幼児の原始的反応についての研究にしても、学習についての実験心理学的研究にしても、<観念—運動>的反射に関する以上のような解釈を裏づけているとは思えないからだ、というのである⁽¹¹⁶⁾。だが、それは、なぜなのだろうか。

われわれは次のように考えることができるのではないだろうか。すなわち、表象の起動力は、原始的なものではなく、すでに考察された運動の原始的諸源泉から派生したに違いない。しかも表象の起動力は、諸源泉のなかでも、刺激からではなく、<われわれのノウハウを規制する外的信号>から、<欲求の対象に由来し欲求の緊張に対応するところの牽引力（すなわち、呼びかけという性格）>から派生したものに違いない、と。このような運動表象の起動的効力という派生的性格というものは、運動の規制における運動表象が弱い役割しか持っていないことを考えるならば、不思議ではないであろう。われわれは通常、自分を取り巻く事物や人間や出来事に合わせながら、自分の運動を規制している。いいかえれば、われわれは自分の行動の文脈を形成しているような時間—空間的信号、その規制力が部分的には予め形成されているような時間—空間的信号に己を合わせながら、自分の運動を規制しているのである⁽¹¹⁷⁾。

われわれが自分の行おうとしている動作について予め形成する表象は、この運動の規制に対して小さな役割を果たすにすぎないが、適正な実行に対しては、しばしばこれを攪乱することさえあるのだ。大抵の場合、われわれは、運動、とくに代償的な運動についての、そして全体的姿勢についての正確な表象を、持つことは出来ない。そもそも、運動表象の通常の機能とは、事後に運動を評価するということに存するのであって、運動を開始するとか運動を規制するといったことにあるのではない。

こうしたことこそが、リクールによれば、運動表象のモデル機能なのであって、踊りを踊る人であれ、テニスをする人であれ、人は皆、そのようにして運動しているのである⁽¹¹⁸⁾。すなわち、「或る種の知覚と或る種の行動との生命的統一こそが、人間が学習の経験なしでもなす術を心得ている諸行動の真の源泉なのである。まさにこの源泉から運動イメージの規制力が派生してくる。身体の行動が世界の認識に内蔵化されるのは、そうしたあらかじめ形成されたノ

ノウハウのレベルにおいてなのである」⁽¹¹⁹⁾。

したがって、〈観念－運動〉的反射に対する批判は、模倣という事象の解釈全体を改めて検討するようわれわれに求めることになる。というのは、かりに「モデルによる運動の規制が〈観念－運動〉的反射の特殊な一例にすぎない」⁽¹²⁰⁾とするならば、当然、模倣も同じように説明されなければならないはずだからである。だからこそ、P. ギョームは〈精神的モデルについて行った説明の仕方を、そのまま外的モデルに適用しなければならない〉、そして〈その外的モデルは、幼児における把握や操作といった運動を操っている信号の原初的な規制作用から派生するものでなければならない〉と確信したのである。

しかし、それでもなお、リクールは、「模倣の命運を運動的イメージの命運から完全に切り離す必要はないのか」⁽¹²¹⁾、と問う。いいかえれば、模倣を、〈運動的イメージによる反射〉に結びつけなければならない根拠とは、一体、どこに見出されるのか、彼はそう問うているのである。

古典的心理学は、人間行動の理解において、原子論的、要素主義的な立場に立つ。しかし、こうした立場から、人間行動を適正な仕方では捉えることはできない。これに対して、ゲシュタルト心理学は、全体的に知覚された形態と、全体と見なされた運動群との間には、「構造的類似性」⁽¹²²⁾が見出されることを明らかにしている。

それでは、外的モデルによって引き起こされる行動は、ノウハウに属するのか、それとも反射に属するものなのか。それは、ノウハウに属するのであって、反射に属するのでは決してない。反射は、意志作用によって抑制することのできないものである。それでは、ノウハウは、「意志作用がつねに自分に同化しようとする衝動につねに従属」⁽¹²³⁾しているのだろうか。ノウハウが衝動に従属しているとはいえ、意志作用はその衝動を己れに同化しようのであり、この点において、ノウハウは反射から区別されなければならないのである。

リクールは、〈模倣は反射的性格をもたない〉と主張する。なぜなら、反射は常同的・分離可能・抑制不可能という性格をもつが、模倣にはそのような性格がないからである。何かをモデルにした類似の行動が、原初的起動力をもっている。しかし、それは、あくまでも「規制の力」⁽¹²⁴⁾であって、機械的な産出力ではない。それでは、モデルはどのようなのだろうか。モデルも、「距離を置いて作用する」⁽¹²⁵⁾という点では、あらゆる規制的な対象と同様である。したがって、モデルが引き起こすのは、反射的反応ではなく、自発的な行動なのである。

誰かが何かをモデルにした行動を起こしたとすれば、この何かは誰かにとってモデルとしての威光ないし性格をもっているからなのである。人々に訴えかけ、呼びかけるような力を具えているということによって、主体によって知覚された形態が、主体の行動を規制することになる⁽¹²⁶⁾。これに対して、主体は、軽蔑の対象でしかないもの、関心のないものを、模倣しようとはしない。そうしたものは、類似した行動を引き起こす力をもたないのである。

リクールの考えは次のようにまとめられる、「本来の反射を除けば、さまざまの対象は意志によって同化しようとする感情的衝動を共犯にしてしか作用しないのである。モデルは、運動を規制するが、運動を産み出すのではない。モデルはおそらく、類似したものの類似したものに及ぼす直接的な力によって運動を規制するわけだが、しかしこの作用は、どんな意味でも完結した分離可能な効力をもっていないのである。したがって、モデルにもとづく行動は、反射のサイクルには属さない。仮にそれが原始的なものだと仮定しても、それはノウハウのサイクルに属しているのである」⁽¹²⁷⁾。

6. <精神的=身体的>コーギト

リクールは、「人間の行動の後々の運命を担うのは、あらかじめ形成されたノウハウである」⁽¹²⁸⁾と結論する。つまり、人間の行動は、<あらかじめ形成されたノウハウ>から出発して理解されなければならないのである。

彼はこう述べる、「身体の一切の習慣において旋律的核〔旋律的細胞〕の役を果たすのは、世界の現前に同調されたそれらの行動図式である。しかし、後に修得されたノウハウも、情動のなかに無秩序な、時には歪められた形で現れてくるのであり、その情動は、あらかじめ形成されたノウハウの『不調』という限りで、まだ状況への大雑把な適合を実現している。世界に対して私が及ぼしうる、また自由を有効ならしめる支配力は、知覚するコーギトと自己の身体の運動との間の、最初の連続性を前提にしている。つまり、認識と運動とは、身体の予め準備された意志的運動では実現できないほど根本的に、そして原始的に結びついているのである。ここでは、精神的なしかも身体的なコーギト、つまり志向と運動が、努力の手前で、引き裂きえない統一を実現している。メーヌ・ドゥ・ピランが述べていたように、『人間は生命力において単純なものなのである』⁽¹²⁹⁾。

知覚するコーギトと自己の身体の運動、思考と運動、認識と運動、これは、原初的に合一している。この不可解な合一がノウハウにおいて実現しているのである。「ノウハウは、運動と思考との不可解な合一を、当初から、しかもすべての反省、すべての知、すべての意志のもっと基底において、解決していると同時に、可能的努力の素材としても与えられている」⁽¹³⁰⁾。だから、ノウハウは、反射から根本的に、しかも原理的に区別されるのである。

こうしたリクールの考えに対して、ひとは次のように反論することができるであろう。すなわち、<運動を産み出すこと>と<運動を規制すること>との間には程度の差異があるだけであって、本性上の差異はない、というべきである。実際、知覚的信号はそれだけで反射のように、誤りなく運動を産み出している。してみれば、撤回可能なノウハウというものは、精神状態全体によって止められた自動運動にすぎないことになる。ゲシュタルト心理学者に倣って言えば、ノウハウは、<全体的領野によって諸作用により容易に統合されうるような適応性>を意味している。この点において、ノウハウが反射から区別されるだけなのだ、と。

しかし、リクールは、<こうした反論、こうした体系的な見解には、当初からの偏見が働いている>と指摘する。「原理的に言って、知覚の形式的・構造的な諸要素は、意志的支配の手が届きうる諸衝動を要因とする布置のなかでのみ作用しうるのだ。形式が行動を規制するのは、そのような衝動に反映されている対象の性格と結びついたときだけなのである」⁽¹³¹⁾。

さらに、ひとは、精神病理学の結論を援用して、原初的な自動運動を主張するかもしれない。たしかに、疲労とか放心、精神衰弱、強度の神経症、ある種の精神錯乱といった病理現象は、いわば意識を単純化し、根本的な自動運動を復活させるように見える。いいかえれば、患者においては、起動力がたんなる信号そのものに化してしまっただけに見える。解体した意識、崩壊に瀕している意識は、表象の圧力によってだけであっても、ひとりだけで作動し始める自動運動という原始的な性格を示しているように見えるのである⁽¹³²⁾。

しかしながら、リクールは次のように言うのである、「<意識の解体は、意識と意志とが複雑化することでそこを抜け出してきたといった単純で原初的な諸形態への還帰を示すものではない>ということをおぼえてはならない。習慣とノウハウの準反射への変質は、もっと別な意識

から生じた独自の産物なのである。正常な意識を、病気によって単純化されてしまったような意識から説明できると期待してはならない。だから、われわれはむしろ、意志作用にも開かれている或る種のあらかじめ形成された運動ないしノウハウ——だから、意志作用はそれらを統御することもできるのだ——から出発して、行動を理解しようとしたのである」⁽¹³³⁾、と。

注

- (1) Paul Ricœur, *Le volontaire et l'involontaire*, (Aubier Editions Montaigne, Paris, 1967), p. 235. ポール・リクール (滝浦静雄・竹内修身・中村文郎訳) 『意志的なものと非意志的なもの II 行動すること』(紀伊國屋書店、1995年)、433頁。以下、訳文は邦訳書によるが、地の文章との関係から、訳文を変更した箇所がある。
- (2) Id., *ibid.*. 同前、433頁。
- (3) 滝浦静雄「訳者あとがき」、同前、598頁。
- (4) Id., *ibid.*, p. 216. 同前、400頁。
- (5) *Ibid.*. 同前。
- (6) *Ibid.*. 同前。
- (7) *Ibid.*. 同前。
- (8) *Ibid.*. 同前。
- (9) *Ibid.*. 同前。
- (10) *Ibid.*. 同前。
- (11) *Ibid.*. 同前。
- (12) *Ibid.*. 同前。
- (13) *Ibid.*, p. 217. 同前、401頁。
- (14) *Ibid.*. 同前。
- (15) *Ibid.*. 同前。
- (16) *Ibid.*. 同前、402頁。
- (17) *Ibid.*. 同前。
- (18) *Ibid.*. 同前。
- (19) *Ibid.*. 同前。
- (20) *Ibid.*. 同前。
- (21) *Ibid.*. 同前。
- (22) *Ibid.*. 同前。
- (23) *Ibid.*. 同前、403頁。
- (24) *Ibid.*. 同前。
- (25) *Ibid.*, p. 218. 同前。
- (26) *Ibid.*. 同前。
- (27) *Ibid.*. 同前、404頁。
- (28) *Ibid.*. 同前。
- (29) *Ibid.*. 同前。
- (30) *Ibid.*. 同前。

- (31) *Ibid.* .p. 219. 同前、405頁。
(32) *Ibid.* 同前、406頁。
(33) *Ibid.* 同前。
(34) *Ibid.* 同前。
(35) *Ibid.* .p. 220. 同前、407頁。
(36) *Ibid.* 同前。
(37) *Ibid.* 同前、407—408頁。
(38) *Ibid.* .pp. 220—221. 同前、408頁。
(39) *Ibid.* .p. 221. 同前。
(40) *Ibid.* 同前。
(41) *Ibid.* 同前、409頁。
(42) *Ibid.* 同前。
(43) *Ibid.* 同前。
(44) *Ibid.* .p. 222. 同前、410頁。
(45) *Ibid.* 同前。
(46) *Ibid.* 同前。
(47) *Ibid.* 同前。
(48) *Ibid.* 同前、411頁。
(49) *Ibid.* 同前。
(50) *Ibid.* 同前。
(51) *Ibid.* .p. 223. 同前。
(52) *Ibid.* 同前。
(53) *Ibid.* 同前、412頁。
(54) *Ibid.* 同前。
(55) *Ibid.* 同前。
(56) *Ibid.* 同前。
(57) *Ibid.* 同前。
(58) *Ibid.* 同前、413頁。
(59) *Ibid.* .p. 224. 同前。
(60) *Ibid.* 同前。
(61) *Ibid.* 同前。
(62) *Ibid.* 同前。
(63) *Ibid.* 同前。
(64) *Ibid.* 同前。
(65) *Ibid.* 同前。
(66) *Ibid.* 同前、413—414頁。
(67) *Ibid.* 同前、414頁。
(68) *Ibid.* 同前。
(69) *Ibid.* 同前。
(70) *Ibid.* 同前。

- (71) *Ibid.*, p. 225. 同前。
- (72) *Ibid.* 同前、415頁。
- (73) *Ibid.* 同前。
- (74) *Ibid.*, p. 226. 同前、416頁。
- (75) リクルールの表現「特権的な行動 (*comportement privilégié*)」(*Ibid.*, p. 226. 邦訳、416頁)を、
 <最適の行動>と訳すこともできる。『生体の機能』の邦訳では、「最適」の行動(『生体の機能』村上 仁・黒丸正四郎訳、みすず書房、昭和32年〔1957年〕、182頁)という訳語が用いられている。ゴルトシュタインは「最適な行動様式 (*ausgezeichneten Verhaltensweisen*)」(邦訳、同前、183頁)を次のように定義している、「われわれは生体を、ある時は通常行われているように、部分、肢節、器官から成立せるものとして観察し、またある時は生体の本来の状態において観察するのであるが、最初の観察法によって可能と考えられる行動様式のすべてが現実に認められるわけではなく、その中のある一定数のみ実際に出現する。われわれはこのような行動様式を『最適なる行動様式』 *ausgezeichneten Verhaltensweisen* と呼ぶ」(同前、182-183頁)。
- (76) *Ibid.*, p. 226. 前掲、滝浦他訳、416-417頁。
- (77) *Ibid.* 同前、417頁。
- (78) *Ibid.* 同前。
- (79) *Ibid.*, p. 227. 同前、418頁。
- (80) *Ibid.* 同前。
- (81) *Ibid.* 同前。
- (82) *Ibid.* 同前。
- (83) *Ibid.*, p. 228. 同前、419頁。
- (84) *Ibid.* 同前。
- (85) *Ibid.* 同前、420頁。
- (86) *Ibid.* 同前。
- (87) *Ibid.* 同前。
- (88) *Ibid.* 同前。
- (89) *Ibid.* 同前。
- (90) *Ibid.* 同前、421頁。
- (91) *Ibid.*, pp. 228-229. 同前。
- (92) *Ibid.*, p. 229. 同前。
- (93) *Ibid.* 同前。
- (94) *Ibid.* 同前、422頁。
- (95) *Ibid.* 同前。
- (96) *Ibid.* 同前。
- (97) *Ibid.* 同前。
- (98) *Ibid.* 同前、422-423頁。
- (99) *Ibid.*, p. 230. 同前、423頁。
- (100) *Ibid.* 同前。
- (101) *Ibid.* 同前。
- (102) *Ibid.* 同前。

- (103) *Ibid.* 同前。
(104) *Ibid.* 同前。
(105) *Ibid.* 同前。
(106) *Ibid.* 同前、423—424頁。
(107) *Ibid.* 同前、424頁。
(108) *Ibid.* .p. 231. 同前、425頁。
(109) *Ibid.* 同前。
(110) *Ibid.* 同前。
(111) *Ibid.* 同前。
(112) *Ibid.* 同前。
(113) *Ibid.* 同前。
(114) *Ibid.* 同前。
(115) *Ibid.* 同前。
(116) *Ibid.* 同前、426頁。
(117) *Ibid.* .pp. 231—232. 同前。
(118) *Ibid.* .p. 232. 同前、426—427頁。
(119) *Ibid.* 同前、427頁。
(120) *Ibid.* 同前。
(121) *Ibid.* 同前、428頁。
(122) *Ibid.* .p. 233. 同前。
(123) *Ibid.* 同前、428—429頁。
(124) *Ibid.* 同前、429頁。
(125) *Ibid.* 同前。
(126) *Ibid.* 同前。
(127) *Ibid.* 同前。
(128) *Ibid.* .p. 234. 同前、430頁。
(129) *Ibid.* 同前。
(130) *Ibid.* 同前。
(131) *Ibid.* 同前、431頁。
(132) *Ibid.* .p. 235. 同前。
(133) *Ibid.* 同前、431—432頁。